



教育者・書家・研究者として書道の発展に貢献

「文字を書く」ことの豊かさを 藤原鶴来先生に学ぶ



藤原鶴来

1893(明治26)年、岡山県玉野市生まれ。本名・茂。岡山師範学校(現岡山大学教育学部)で詩書家・大原桂南に学ぶ。岡山第一中学校教諭を経て、1922年から定年まで香川師範学校・香川大学教育学部で教授として書道教育に打ち込むかわら、「和漢書道史」「書源」などを編纂。代表作は中国陝西省西安市青龍寺の「空海記念碑」、香川県内にも多くの墨跡が残り、文部大臣による「地域文化功労者」表彰をはじめ高い評価を受けた。

藤原鶴来写真 出典:鶴来先生墨蹟集(平成5年3月30日発行)

日本の書道史に残る
ベストセラーを編著

藤原鶴来は幼い頃から書に興味を持ち達筆である一方で「教師になりたい」という思いも温めていました。1922年から36年間、香川師範学校・香川大学教育学部教授として空海その他の有名書家の研究に徹し、多くの書作品と研究成果を残すとともに書道教育に尽

力されました。鶴来の書道哲学は多くの門下生に強い感銘を与え、有名な書道家を輩出させています。大きな目、白い歯を出してやんわり笑う姿が印象深かったと今に伝わります。

香川県庁銅標や四国村の額以外にも、高松市内を中心に県内には鶴来のたくさん作品を石碑や標柱としてみることが出来ます。なげなく通り過ぎてしまいがちです

が、あらためて見ると力強く堂々とした風格とともに読みやすさと親しみやすさを感じる作風です。

「私たち世代の書に携わる人間にとって、鶴来先生は伝説的な存在です」と、教育学部の小西憲一教授。香川大の3代目書道専任教員です。「鶴来先生には、教育者・書家・研究者という3つの顔があります。最も知られている業績は、研究者として残した『和漢書道史』『書源』

などの編著でしょう」。

鶴来は多くの書道関連書を出版し、我が国の書道界に大きく貢献しています。中でも1927年33歳の著作「和漢書道史」は、書道史をわかりやすくまとめた解説書です。当時、文部省検定・中等教員習字科受験のためのまとまった書道史のテキストがなく、全国の受験生のためにつくったものです。

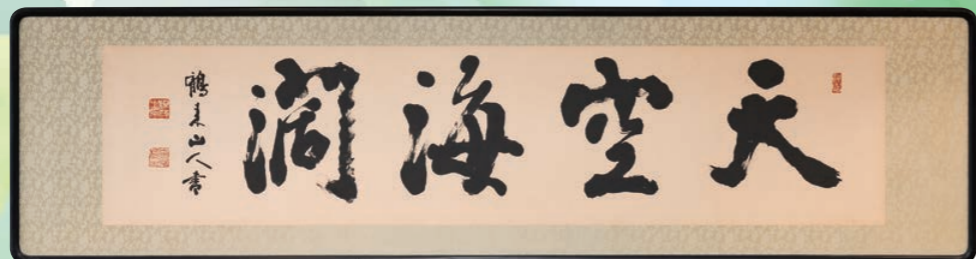
『書源』は古典文字を原寸サイズで「文字二文字切り貼りしてまとめた1,600ページ超の大作。戦前から制作を始めたようですが、編集の原稿が高松空襲で自宅もろとも焼失し、76歳で完成するまで35年を要しました。書体字典の金字塔として今も広く愛用され、『和漢書道史』と並んで書道界の双壁とされるベストセラーです。



香川県庁銅標

記念碑に込めた 空海への想い

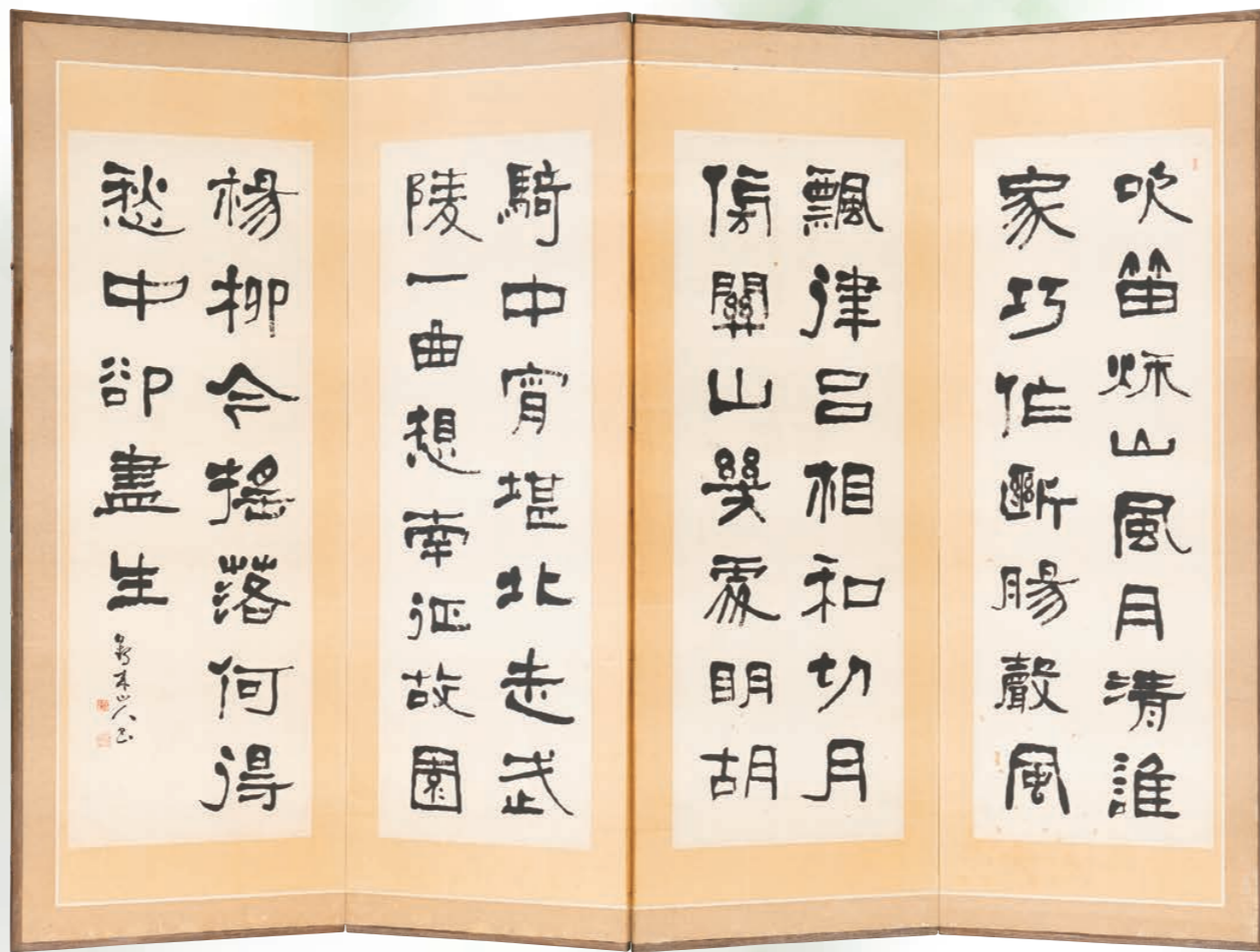
数多い鶴来の墨跡の中でも代表作とされるのが、中国陝西省の青龍寺にある「空海記念碑」。青龍寺は空海



「天空海闊」藤原鶴来

香川県知事応接室に掛かっている扁額。「天空と海がはてなく広々としている」様子を表す言葉で、転じて「度量が大きく何のわだかまりもない」ことも意味する

が密教を学んだ地であることから、四国八十八箇所のお参り所としても知られています。この記念碑は四国と西安市の友好親善事業で1982年に建立された石碑です。三筆にも数えられる書聖・空海の記念碑を揮毫するにふさわしい書家として選ばれた鶴来は、大きな使命感とともに制作に打ち込みました。「鶴来先生が得意とした重厚な隸書体で、空と海の雄大なイメージ



杜甫『吹笛』藤原鶴来

昭和二十五年、日展出品作。香川大学教育学部所蔵。杜甫の詩を得意の隸書で書いています。鶴来は器用な人で、屏風仕立ても含めた表装はすべて、自ら刷毛(はけ)をもって行っていたそうです。

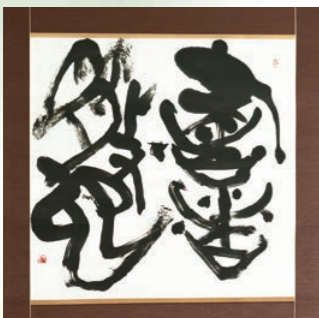
だけでなく空海に対する強い思いがうかがえる、奥行きのある作品です」と小西教授。記念碑は高さ9メートル、実際に下から見上げた時に美しく見えるよう計算したバランスで書かれています。

教育の場における 「書道」の役割

「私自身も教育者として、子どもたちに『手で書く』『字を書く』楽しさを伝えられる教員を送り出したと思っています」と小西教授。「文字は教育の最初の入口であり、人類の進化を支えてきたコミュニケーションツールです。字を書く時に活性化される脳の働きは、液晶画面のタップでは生まれません。教育者は手間暇かけて文字を完成させる楽しさと、書を持つインパクトを大切に

てほしい。空海は「古人筆論云、書者散也」という言葉を残しています。これは、空海が中国の古い書論を引用しながら述べたもので、「書」というものは、散である。自分の中にある思いを解放し、森羅万象を表現するものである。」という意味です。私自身も、書を通じて自分の中にある思いを開放したい、という気持ちだけはずっと持ち続けています。」

文字もAIもツールとして使うのは人。どう使い、何を表現し伝えたいのか。テクノロジーが進化する現代社会だからこそ、自分の心を自由に表現する豊かな「書」の文化を改めて見つめてみてはいかがでしょうか。



「書者散也」小西憲一 2018年69cm×70cm



「お話を伺いました!」

香川大学教育学部教授 小西 憲一(こにしけんいち)

広島市出身。筑波大学大学院芸術研究科美術専攻修了。神奈川県立高校教諭、筑波大学技官、助手を経て、1995年に香川大学教育学部講師。助教授を経て2005年より現職。担当は書写書道。専門は篆刻。日展会友、毎日書道展審査会員。

人×テクノロジー 次の進化への挑戦

「人×テクノロジー
次の進化への挑戦」

AIを活用し、空海の筆跡を再現。空海の書に関する文献を機械学習させ、ゴシック体の文字をベースに今号の表紙テーマを作成しました。(岡崎准教授(P22-P23)が小西教授の協力を得て作成。)